

# 中学校家庭科家族・保育学習における 子どもの自己認識形成評価への心理測定尺度適用の試み(1)

— 教科としての目標達成を目指す家庭科評価研究(第2報) —

佐藤 園 ・ 河原 浩子\* ・ 平田美智子\* ・ 小橋 和子\*\* ・ 原田 省吾\*\*

本継続研究の目的は、家族・保育学習が、教科の目標である「家庭生活を営む力」の育成を通して、学習者の人格形成にどう関わるのかを心理測定尺度適用により試みることを目的とするものである。客観的に測定しようとする評価研究である。第1報で検討したように、平成20年3月末に告示された平成20年版学習指導要領に示された中学校「技術・家庭(家庭分野)」の家族・保育学習には、その目的を達成するために解決すべき課題が2点存在した。第一は、目的に相当する「学習者と子どもの関わり」を学ぶ内容が欠落していること、第二は、保育学習が学校教育の目的である学習者の「人格形成」にどのように関わるのかを客観的に評価する方法がないということである。本報では、第一の課題解決を目的として、岡山大学教育学部附属中学校で取り組まれている授業開発研究「Flour Baby Project」を踏襲し、心理測定尺度を適用し、その授業における子どもの心理変化を測る調査用尺度を11要因91項目で構成した。2008年3月に、同校第2学年200名(男子100名、女子100名)を対象にプレテストを行い、回答を得られた134名(男子54名、女子80名)の結果を、統計ソフトSPSSにより信頼性について分析した。その結果、11要因それぞれにおいてクロンバックの $\alpha$ 係数が0.7以上もしくはそれに近い値が得られ、作成した調査用紙が中学生に適用可能なことが確認された。

**Keywords：**家庭科，人格形成，評価研究，保育学習，心理測定尺度

## 1. はじめに

第1報<sup>1)</sup>で検討したように、平成20年3月末に告示された学習指導要領に示された中学校「技術・家庭(家庭分野)」(以下、「中学校家庭科」と称す)は、家族・保育学習と被服学習において、その目的に相当する内容が欠落していた。そのため、中学校家庭科が、教科固有の目的である「家庭生活を営む力」を学習者に育成し、それを通して学校教育の目的である「学習者の人格形成」を達成していくためには、以下の二つの課題を解決していくことが不可

欠であると捉えられた。

課題①：欠落している家族・保育学習と被服学習の目的を学ぶ内容を開発すること

課題②：①を補った上で、「学習者と家族・保育」、「学習者と被服」との関わりを探究する学習が、どのように学校教育の目的である「学習者の人格形成」に寄与できるのかを、客観的に明らかにすること

本報では、上記の家族・保育学習に関する課題①②について考えていきたい。

まず、課題①であるが、これは、岡山大学教育学部附属中学校で「Flour Baby Project」(以下、「F

---

岡山大学教育学部家庭講座 700-8530 岡山市津島中3-1-1

Attempt of psychology measurement standard application to the child's self-recognition formation evaluation in junior high school home economics family and child care study (1) : Home economics evaluation research that aims at accomplishment of a goal as subject (2)

Sono SATO, Hiroko KAWAHARA\*, Michiko HIRATA\*, Kazuko KOBASHI\*\* and Syogo HARADA\*\*

Department of Home Economics Education, Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Okayama 700-8530

\*Graduate School of Education(Master's Course), Okayama University

\*\*Junior High School Attached to the Faculty of Education, Okayama University, 2-13-80, Higashi-yama, Okayama, 703-8281

ＢＰ」と称す)の授業開発研究として行われている。本報では、この授業開発研究を踏襲し、課題②について検討する。

## II. 平成10年版学習指導要領に示された中学校家庭科家族・保育学習の内容と評価方法

本継続研究で踏襲する本学部附属中学校におけるF B Pは、現行の平成10年版学習指導要領に示された家族・保育学習と評価方法に基づいて開発研究がなされている。第1報では、平成20年版学習指

導要領に示された家族・保育学習についてのみ検討を行っているため、ここでは、平成10年版学習指導要領に示された家族・保育学習とその評価方法について考察しておきたい。

### 1. 平成10年版・平成20年版学習指導要領にみる家族・保育学習の内容

平成10年版と平成20年版学習指導要領に示された家族・保育学習の内容を、第1報で述べた「家庭生活の営み」の定義からまとめると、表1<sup>2) 3)</sup>になる。

表1 平成10年版・20年版学習指導要領に示された中学校家庭科家族・保育学習の内容編成

	平成10年版学習指導要領		平成20年版学習指導要領	
	「B 家族と家庭生活」		「A 家族・家庭と子どもの成長」	
目的	(1)自分の成長と家族や家庭生活とのかかわり		(1)自分の成長と家族 ア自分の成長と家や家庭生活とのかかわり	
方法	(3)家庭と家族関係 ア家庭や家族の基本的な機能 家族関係をよりよくする方法 イ家庭生活と地域人々	(2)幼児の発達と家族 ア幼児の観察や遊び道具の製作 幼児の遊びの意義 イ幼児の心身の発達の特徴 子どもが育つ環境としての家族の役割 (5)幼児の生活と幼児のふれあい ア幼児の生活に関心を持つ 課題をもって幼児の生活に役立つものを作る イ幼児の心身の発達 幼児とのふれあいやかかわり方の工夫	(2)家庭と家族の関係 ア家庭や家族の基本的な機能 イ自分と家族とのかかわり 家族関係をよりよくする方法	(3)幼児の生活と家族 ア幼児の発達と活の特徴 子どもが育つ環境としての家族の役割 イ幼児の観察や遊び道具の製作遊びの意義 ウ幼児とのふれあい エ幼児への関心とかかわり方工夫

(引用文献2) 3) より河原作成)

表2 中学校技術・家庭(家庭分野)「B 家族と家庭生活」の家族・保育学習の評価基準

	生活や技術への関心・意欲・態度	生活を工夫し創造する能力	生活の技能	生活や技術についての知識・理解
(1)自分の成長と家族生活とのかかわり	自分の成長と家族や家庭生活との関わりについて、関心を持って学習活動に取り組んでいる。			自分の成長と家族や家庭生活とのかかわりについて気づいている。
(2)幼児の発達と家族	幼児に関心を持ち、幼児の遊びや幼児の発達と家族とのかかわりについて考えようとしている。	幼児の遊びや幼児の発達と家族とのかかわりについて課題を見つけ、その解決を目指して工夫している。	幼児の遊びや幼児の発達と家族とのかかわりについて、観察したり調査したりすることができる。	幼児の遊びや幼児の発達と家族とのかかわりに関する基礎的な知識を身に付けている。
(3)家庭と家族関係	家庭と家族関係について、関心をもって学習活動に取り組み、家族生活をよりよくしようとしている。	家庭と家族関係について課題を見つけ、その解決を目指して工夫している。	家庭と家族関係に関する基礎的な技術を身に付けている。	家庭や家族の基本的な機能、家庭生活と地域の人々とのかかわりに関する基礎的な知識を身に付けている。
(5)幼児の生活と幼児との触れ合い	幼児の生活と幼児との触れ合いについて関心を持ち、主体的に学習活動に取り組む、幼児と適切にかかわろうとしている。	幼児の生活と幼児との触れ合いについて課題を見つけ、その解決を目指して自分なりに工夫し、創造している。	幼児の生活に役立つものの製作や幼児との触れ合いができる。	幼児について理解を深めるとともに、幼児の生活に役立つものの製作や幼児とのかかわり方に関する基礎的な知識を身に付けている。

(引用文献4) より河原作成)

これをみると、平成10年版と平成20年版の学習指導要領に示された家族・保育学習の内容は、基本的には変わっておらず、保育学習の目的である「学習者と子ども」の関わりを学ぶ内容が欠落していることがわかる。

## 2. 家族・保育学習の評価方法

それでは、この家族・保育学習に対して、平成14年2月に国立教育政策研究所教育課程研究センターから公開された『評価基準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料』では、どのような評価がなされているのであろうか。

上記資料に示された家族・保育学習の評価基準は、表2<sup>4)</sup>に示すとおりである。

これから、家族・保育学習の評価基準は、表1の家族・保育学習の内容を、第1報で考察した「家庭科の評価の観点」から捉え直して設定されていることがわかる。しかし、表2に示された評価の観点からは、中学校の家族・保育学習が、どのように学習者の「人格形成」に結びつき、それをどう客観的に評価できるのか、という観点を読みとることはできない。

## 3. 平成10年版学習指導要領に示された家族・保育学習の問題点

以上から、平成10年版学習指導要領中学校家庭科の家族・保育学習には、平成20年版のそれと同様の問題が存在し、次の二つの課題を解決しなければ、教科の目的が達成できないことになる。

第一は、欠落している保育学習の目的を学ぶ内容を開発していくこと。第二は、第一の課題を補った上で、「学習者と人との関わり」を探求する学習が、どのように学校教育の目的である学習者の「人格形成」に寄与できるのかを客観的に明らかにしていくことである。

したがって、本報で目的としたように、第一の課題解決のために取り組まれている本学部附属中学校のF B Pの授業開発研究を踏襲し、第二の課題解決を考えていくことは、現行および平成20年版の学習指導要領に示された家族・保育学習を実践していく上で、重要な意味を持つと捉えることができる。

## III. 岡山大学附属中学校における授業開発研究F B Pの概要と家族・保育学習

それでは、本学部附属中学校では、どのような家族・保育学習とF B Pの授業開発研究が行われているのだろうか。

## 1. 授業開発研究F B Pの位置づけ

本学部附属中学校では、第2・3学年の家庭科の授業を表3<sup>5)</sup>のように計画し、第2～3学年にかけて家族・保育学習の単元「わたしたちの成長と家族」を位置づけている。

第3学年の「わたしたちの成長と家族」を編成している小単元1・2は、表1で検討した学習指導要領の内容が配列されている。しかし、保育学習の目的を学ぶ学習が欠落しているため、第2学年の「わたしたちの成長と家族」の導入としてF B Pの授業を開発している。

## 2. F B Pの内容

### (1) F B Pの開発過程

附属中学校でのF B Pの開発過程は、これまでその段階を追って報告されているが、それをまとめると表4<sup>6) 7) 8)</sup>になる。

附属中学校では、前述した保育学習の目的に相当する内容を補うために、「保育学習において全ての生徒が乳幼児との関わりを経験する中で、自分が親になるということを考え、自己理解を図る中学校家庭科授業の開発」を目的として、アメリカのミドルスクールで実践され、わが国の大学生・大学院生に追試されたF B Pに着目し、段階的に授業開発を行っている。

具体的には、開発の第一段階として、中学校におけるF B Pの実施可能性を検討するために「総合的な学習の時間」で、第二段階として、家庭科での実施を検討するために選択教科の「家庭」で、第三段階として、必修教科の「技術・家庭（家庭分野）」で、F B Pを実践し、その有効性を検討している。その結果、生徒は、Flour Baby（以下、F Bと称す）に対する愛着、世話の大変さ、現在及び将来の自己認識等を獲得していた。しかし、その認識はプロジェクトの実施条件によって異なっており、①F Bの重さは自分が生まれた時の体重で、②授業を複数回に分割して行う場合は、授業間隔は一週間が望ましいこと、③生徒個々のF B Pの経験に加えて、ディスカッションを行うこと、④さらに可能であれば、学校だけでなく、休日を利用して家庭でF Bの世話をする活動を組み込んだ方がより効果があることが把握された。

現在は、授業開発の第四段階として、以上の①～④に加え、⑤中学校のF B Pの目的を「生徒の現在の自己認識」とし、⑥保護者の感想やインタビューをディスカッションに取り入れ、必修教科「技術・家庭（家庭分野）」の家族・保育学習の導入授業と

表3 岡山大学教育学部附属中学校技術・家庭科（家庭）の指導計画

第2学年 前期 技術・家庭科（家庭）の授業

技術・家庭科の目標・特性		わたしたちの現在および将来の生活に必要な知識や技術を身につけるために、実践的・体験的な学習を中心にを行います。そして、生活と技術の関連を理解し、生活をよりよくしようとする態度や能力を身につけ、生活に生かす楽しさを味わうことがねらいです。 以上のようなことを、個に応じた学びをより充実させるという観点から、技術・家庭科では学級を半分に分け、少人数での学習を行います。
評価の観点	生活に対する関心・意欲・態度	生活や技術に関心を持ち、意欲的に学習に取り組もうとしている。
	生活を工夫し創造する能力	技術を活用し、生活を工夫し創造することができる。
	生活の技能	生活や技術に関する基礎的な技能を身につけている。
	生活や技術についての知識・理解	生活や技術に関する基礎的な知識を身につけている。
授業内容・単元構成	第2学年技術・家庭（家庭）の学習	○ これまでの技術・家庭（家庭）の学習を振り返りながら、第2学年の学習の流れを把握し、この1年間の学習における自分の課題をもつことができる。 わたしたちの生活と物(衣・食)や人(家族)とのかかわり
	わたしたちの衣生活 5 衣服の手入れと補修	○ 衣服の手入れと補修の必要性を理解する。 ○ 繊維の種類とその性質を理解し、適切な衣服の手入れや補修の方法を判断することができる。
	6 これからの衣生活	○ 衣生活の学習を振り返り、自分の衣生活の課題をまとめることができる。 ○ 学習したことを工夫して、生活に生かすことができる。
	わたしたちの食生活 1 中学生の栄養と食事	○ 食事の果たす役割を理解し、栄養バランスのよい食事をとる工夫ができる。 ○ 食事に含まれる栄養素の働きを理解する。 ○ 中学生の時期の身体的特徴と、それに伴う栄養所要量を満たす献立を立てることができる。
	わたしたちの成長と家族 1 Flour Baby Project (フラワーベビープロジェクト)	○ 人は人との関わりで成長することについて理解することができる。 ○ 自分の成長における家族の役割について考えることができる。 ○ 自分を人との関わりでここまで成長した存在としてとらえることができる。
学習に使用する教科書・副教材・材料・道具・ファイルなど		○ 教科書「新しい技術・家庭 家庭分野」 ○ 資料集、技術・家庭科総合ノート ○ 家庭科ノート ○ クッキングカード（必要なときに連絡します） ○ はさみ、色鉛筆（必要なときに連絡します） ○ エプロン・三角巾・手拭き用タオル（調理実習時）

第3学年 前期 技術・家庭科(家庭)の授業

技術・家庭科の目標・特性		わたしたちの現在および将来の生活に必要な知識や技術を身につけるために、実践的・体験的な学習を中心にを行います。そして生活と技術の関連を理解し、生活をよりよくしようとする態度や能力を身に付け、生活に生かす力に結び付けていくことがねらいです。 以上のようなことをふまえ、安全で効果的な学習の充実及び個に応じた学習の充実という観点から、技術・家庭科では学級を半分に分けて学習を行います。
評価の観点	生活に対する関心・意欲・態度	生活や技術に関心を持ち、意欲的に学習に取り組もうとしている。
	生活を工夫し創造する能力	技術を活用し、生活を工夫し創造することができる。
	生活の技能	生活や技術に関する基礎的な技能を身につけている。
	生活や技術についての知識・理解	生活や技術に関する基礎的な知識を身につけている。
授業内容・単元構成	はじめに	○ これまでの2年間の学習を振り返りながら、この1年間の学習の流れを把握して、この1年間の家庭科の学習における自分の課題をもつことができる。
	わたしたちの成長と家族 1 幼児の発達と家族	○ 幼児の心身の発達の特徴を理解する。 ○ 幼児の生活や遊びと発達とのかかわりについて理解する。 ○ 子どもが育つ環境としての家族の役割について理解する。 ○ 自分の成長と家族や家庭生活のかかわりについて理解する。
	2 幼児の生活と幼児との触れ合い	○ 幼児の特性に関する理解を生かした視点で、幼児を観察したり、幼児とかかわったりすることができる ○ 幼稚園訪問における幼児との触れ合い活動が工夫されたものとなるように計画・準備に積極的に取り組むことができる。
	3 家庭生活と地域とのかかわり	○ 地域社会の一員として、地域の人々とかかわり方を考えることができる。
学習に使用する教科書・副教材・材料・道具・ファイルなど		○教科書「新しい技術・家庭 家庭分野」、資料集 ○ノート（プリントが整理できるようにのりを用意） ○技術・家庭科総合ノート（学習のまとめに使用） ○のり ○その他（はさみ、色鉛筆など必要時に連絡）

表4 中学校におけるF B Pの授業開発過程

		第一段階	第二段階	第三段階		
実践校		岡山大学教育学部附属中学校				
位置づけ		総合学習「ER」	選択「家庭」	必修「家庭分野」の保育学習の導入		
実施年月		平成15年 9 月	平成16年 5 月	平成17年11～12月		
対象者		第2学年	第3学年			
		女子20名	女子16名	男子63名 女子62名	男子 9 名 女子 8 名	男子18名 女子17名
				条件Ⅰ	条件Ⅱ	条件Ⅲ
F Bの体重		生徒の誕生時の体重		生徒の誕生時の体重とは無関係な重さ		
導入		授業第1回（90分） （1週間）	授業第1回（90分） （1週間） 授業第2回（90分） （翌日） 土日の養育 （4日間） 授業第3回（90分） （1週間）	授業第1回（45分） （2週間） 授業第2回（45分） （2週間）	授業第1回（45分） （3週間） 授業第2回（45分） （2日間）	授業第1回（45分） （5週間） 授業第2回（45分） （1日間）
まとめ		授業第2回（90分）	授業第4回（90分）	授業第3回（45分）	授業第3回（45分）	授業第3回（45分）
親子写真		あり				
F B Jの質問項目		・FBと出会った時点での気持ち 3問 ・FBと共に活動して感じたこと 17問 ・FBと別れる時の気持ち 5問 ・プロジェクト終了後の生活 5問 ・自由記述 1問	・FBと出会った時点での気持ち 7問 ・FBと共に活動して感じたこと 27問 ・FBと別れる時の気持ち 0問 ・プロジェクト終了後の生活 0問 ・自由記述 0問	・FBと出会った時点での気持ち 8問 ・FBと共に活動して感じたこと 16問 ・FBと別れる時の気持ち 2問 ・プロジェクト終了後の生活 0問 ・自由記述 1問		
	ディスカッションのテーマ	ディスカッションなし	①FBを世話して感じたこと・考えたこと ②10代で親になること ③親になること	①親になるとは		
	『親になった夫婦のインタビュービデオ』視聴	なし	あり			
	F Bへの愛着	○（80%） ○（95%） ○（95%） ○（45%）	○（63%） ○（88%） ○（ディスカッション） ○（44%） ○（63%） ○（44%）	○（60%） ○（58%）	○（58%） ○（82%）	○（34%） ○（38%）
生徒が獲得した認識	責任・自覚 経済的自立 子育て知識 子中心生活		○（ディスカッション） ○（ディスカッション） ○（ディスカッション）	○（ディスカッション） ○（ディスカッション） ○（ディスカッション）		

(引用文献6) 7) 8) より河原作成)

してF B Pを位置づけ、家族・保育学習で欠落している“自分の成長のふりかえり”から“家族を中心とする人間関係の理解”を通して、“自己理解”を図るための授業開発を行っている。

## (2) F B Pの実施内容

その実施内容を、2007年11月22日の本学部附属中学校「第30回中学校教育研究発表会」で公開されたF B Pの指導計画<sup>9)</sup>に沿って示すと次のようになる。

1) F Bの誕生…第1週：授業1・2 (50分×2)

- ①Baby Journal (以下B Jと称す)の配布
  - ②F B Pの概要説明
  - ③F B養育ルールの説明と誓約としてのサイン
  - ④自分の生まれた時の体重のF Bを作成する
  - ⑤F Bを抱いて、B Jの質問に答える
  - ⑥日常生活で起こり得る活動を組み込んだ校内のコースをF Bと共に散歩する
    - ・スタート調理教室・被服教室→上靴に履き替える→廊下を歩いてトイレに入る→トイレの個室に入って手を洗う→トイレを出て、廊下を歩く→階段を上がる→2階廊下を静かに通る→校舎反対側の階段を下りる→廊下を歩き購買に入る→購買でB Jを綴じるファイルを購入する→購買を出て、中庭に面した通路を通り校舎に入る→廊下を歩く→スリッパに履き替えて教室に入る→調理教室・被服教室ゴール
  - ⑦自分の席で、F Bを抱いたままB Jの質問に答える
  - ⑧F Bと親子写真を撮る
  - ⑨週末の宿題として行うことを確認し、B Jを提出する
  - ⑩F Bを教師の保育所に預ける
- 2) 宿題…土・日曜日  
(金曜日)
- ①放課後、保育所にF Bを受け取りにくる
  - ②安全に注意して、F Bを自宅に連れて帰る  
(土・日曜日)
  - ③養育ルールに沿って家庭でF Bの世話をする
  - ④お家の人に、以下の項目についてインタビューする
    - ・「自分の赤ちゃんが生まれた時の気持ち」・「名前の由来」・「どんな子どもに育ててほしいか」・「子育てをされていてうれしかったこと・大変だったこと」
  - ⑤一日の最後にF Bの質問に答える
  - ⑥家庭で世話をした証明としてお家の人のサインをもらう  
(月曜日)
  - ⑦F Bと一緒に安全に注意して登校する
  - ⑧1時間目が始まるまでにF Bを保育所に預け、B Jを提出する
- 3) ディスカッション…第二週：授業3・4 (50分×2)
- ①B Jと自分のF Bを受け取る
  - ②B Jの質問に回答する
  - ③ディスカッション1：F Bとの活動で大変だったこと
    - ・各班で話し合い、意見をまとめ、発表する→クラス全体で話し合う→B Jに意見をまとめる
  - ④ディスカッション2：F Bが本物だとしたら、さら

にどのような世話が必要になるか

- ・各班で話し合い、意見をまとめ、発表する→クラス全体で話し合う→B Jに意見をまとめる
- ⑤ディスカッション3：自分の家族は自分を育てるために、なぜ、そのような世話ができたのか
  - ・保護者へのインタビューの各自の記録を振り返り、それをもとに班で話し合い、意見をまとめ、発表する→クラス全体で話し合う→B Jに意見をまとめる
- ⑥B Jの質問に回答する
- ⑦F Bとお別れの写真撮影をする
- ⑧B Jを提出し、F Bを教師に返却する

(3) F B Pによる生徒の獲得認識

以上の実践によって、生徒はどのような認識を獲得したのだろうか。生徒のB・Jの質問への回答とディスカッションの授業記録に基づく分析からは、以下の結果が報告されている。<sup>10)</sup>

- ①第一週目の授業のまとめとしての質問「今日の授業を通して考えたこと、感じたこと、疑問に思ったこと等を書いて下さい」に多くみられた記述→「世話の大変さ」「自分の親に対する思い」「F Bが本当の赤ちゃんだとしたらどうなるか」
- ②宿題として家庭でF Bの世話をした後のまとめとしての質問「家庭での活動を通して考えたこと、感じたこと、疑問に思ったことを書いて下さい」に多くみられた記述→「家族・他の人の協力の必要性」「自分の親に対する思い」「現在の自己認識」「将来の自己認識」
- ③第二週目の授業；ディスカッション1→クラスで出された意見を、大きく「体：疲れる、痛い、不便」「心：ゆっくりできない、いつも気にする」「時間：普段、当たり前のようにできることに時間がかかる」の3つに分類した。
 

ディスカッション2→「さらに必要になる世話」としては、食事を与える、あやす、風呂に入れる、おむつを替える等の意見が出た。「それらの大変な世話を自分の親はなぜできたのか」という問いに対しては、「苦しい中にも楽しさがある」「赤ちゃんが特別な存在である」等の意見が出た。
- ④F B Pのまとめとなる質問「中学生としての今の自分が、なぜ、ここに存在していると思うか」に多くみられた記述→親や周囲の人々が世話をし、それを支えてくれたからだ等の「現在の自己認識」に関わる回答に加え、「自分の親に対する思い」等の記述もあった。

以上の記述から、「世話の大変さ (91.5%)」「自分の親に対する思い (83.1%)」「現在の自己認識

(74.6%)」等を、生徒が獲得していることがわかった。また、男女で比較すると、男子は「責任・自覚」を、女子は「FBへの愛着」「家族・他の人の協力の必要性」「養育態度の反省」についての認識を多く獲得していた。

さらに、保護者からは、FBPに対して、次のような意見が寄せられた。

- ①FBが家にやってきて、とても楽しく過ごせた ②親の方が嬉しくなってベビーシッターを喜んで引き受けた ③食事や外出もままならないこと等、沢山の事を学べたようだ ④FBを通して小さい頃の話ができ、有意義な休暇をごせた ⑤誕生時の様子を思い出し、改めて我が子の成長ぶりに感動した

### 3. 本学部附属中学校家庭科における家族・保育学習

以上から、本学部附属中学校で実践されている家族・保育学習は、学習指導要領で欠落していた保育学習の目的に相当する内容をFBPで補い、教科書に示されていた内容を編成・配列し直すことによって、全体を組織していることがわかる。

ここに示されている家族・保育学習は、現在の中学生在が乳幼児と関わる機会が極めて少ないために、保育学習を自分自身に関係あるものとして捉えることが難しく、単なるおもちゃやおやつ作りに終わってしまうという問題を抱えていた指導要領に示されていた保育学習に目的を与え、自分の成長を振り返りながら自分と家族との関わりを見つめ、人の成長に家族や周囲の人々が果たす役割を理解することができるとなっている。これは、第1報で述べた教科としての家庭科の目的達成を目指すことが可能な一つの家族・保育学習の内容編成として評価することができると考えられる。

## IV. 家庭科学習の結果としての「人格」の評価方法への心理測定尺度の適用

次に、第二の課題について考えてみたい。家庭科学習の結果として形成された「人格」は、どのようにして客観的に評価することができるのだろうか。本継続研究では、「人格」を対象として研究を行っている「心理学」に着目した。

心理学や隣接科学の分野の研究では、「心理測定尺度」が研究方法として用いられている。その「心理測定尺度」を、家庭科の学習評価に適用することはできないだろうか。まず、「心理測定尺度」とは何か、から考えてみたい。

### 1. 心理測定尺度とは

「心理測定尺度」に関しては、サイエンス社から出版されている『心理測定尺度集I』の冒頭に、以下のように説明されている。

心理測定尺度とは、個人の心理傾向（意識、感情、状態、態度、欲求、行動など）の程度を測定しようとして工夫された道具であり、言い換えれば、“ある心理傾向について、それと関連する複数の項目から作られた1つの物差し（尺度）である。”<sup>11)</sup>

これから、人格の一側面を心理測定尺度を適用して測定し、評価することができると考えることができる。したがって、心理測定尺度を用いて、家庭科の学習により、どのような心理傾向の変化があったのかを測定することができれば、人格形成がどのように行われたかを評価することができるということになる。

### 2. 家庭科学習の評価方法としての心理測定尺度の適用

では、どのように家庭科学習に心理測定尺度を適用していけばよいのだろうか。第1報で述べた教科としての家庭科のねらい・原理から考えてみたい。

家庭科では、学習者と環境が相互作用することにより、学習者に「家庭生活を営む力」を育成することを通して、学校教育の目的である「学習者の人格形成」を図ることが、他教科では代替することができない目標となる。

これから考えるならば、心理測定尺度を用いて家庭科の学習による「人格」の評価をしていく場合、適用する尺度は二種類必要になる。第一は、生活の主体者としての「学習者自身」の心理傾向を測る尺度、もう一つは「学習者と環境（人・狭義の環境・物）の3側面との関わり」から生じる心理傾向を測る尺度である。

本報では、心理学研究の成果として導出されている心理測定尺度の中から、第一の「学習者自身」の心理傾向を測る尺度と、第二の家族・保育学習による人格形成を評価するための「学習者と人（家族・子ども）との関わり」によって生じる心理傾向を測る尺度を検討してみたい。

### 3. 学習者自身の心理傾向を測る心理測定尺度の検討

それでは、自分自身の心理傾向を測る心理測定尺度としては、どのようなものが開発されているのだろうか。また、その中で、家庭科の学習の結果とし

ての学習者自身の心理傾向を測るには、どの尺度を適用することができるのだろうか。

自己の内面を測る尺度を紹介したサイエンス社の『心理測定尺度集Ⅰ』では、自己の内面に関しては、自己概念や自己への関心、自己への評価などの研究領域が存在しているが、人格的な部分は自己評価に重点をおいて研究されていると説明されていた。<sup>12)</sup> 本継続研究では、自分自身の心理傾向を測る尺度のうち、自己評価に関する尺度から、適用を検討することとした。

#### (1) 自己評価に関する心理測定尺度

自己評価に関する尺度を調べると、以下の心理尺度を紹介した著書では、それぞれ3つの自己評価に関する尺度が掲載されていた。

堀洋道ら監修『心理尺度ファイル』<sup>13)</sup>

- ①自尊感情尺度〔山本・松本・山成, 1982〕
- ②自己受容尺度〔沢崎・佐藤 1984〕
- ③自己愛人格目録日本語版〔大石, 1987〕

堀洋道監修・山本真理子編『心理測定尺度集Ⅰ』<sup>14)</sup>

- ①自尊感情尺度〔山本・松本・山成, 1982〕
- ②自己受容尺度〔沢崎 1993〕
- ③特性的自己効力感尺度〔成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田, 1995〕

これらの尺度をみると、「自尊感情」「自己受容」「自己愛」「自己効力感」を測定する尺度が開発されており、それぞれ異なった自己の内面領域の評価を測定していた。この中で、家庭科の学習の結果として、どの領域の自己評価を測定することに意味があるのだろうか。

第1報でみたように、中央教育審議会答申（平成20年1月17日）の中では、「子どもの心と体の状況」として、「自分に自信がある子どもが国際的に見て少ない。学習や将来の生活に対して無気力であったり、不安を感じたりしている子どもが増加するとともに、友達や仲間のことで悩む子どもが増えるなど人間関係の形成が困難かつ不得意になっているとの指摘もある。」<sup>15)</sup> ことが教育の課題として示されていた。また、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会議事録には、子どもたちが自尊感情をもつことの重要性がたびたび問われ、同部会の『『生きる力』の育成を目指す教育内容・目標の構造（イメージ案：改良版）』<sup>16)</sup> の中の「個人生活における主体性・自立性」の筆頭には、「自尊感情」が掲げられている。

このことから、わが国の学校教育において、子どもの「自尊感情」を上昇させることが大きな課題と

して捉えられていると考えられた。本継続研究では、学校教育の目的を達成する一教科として位置づけられている家庭科の学習結果として、学習者自身の「自尊感情」の変化を測定することに意味があると判断した。

#### (2) 自尊感情尺度

前述したように、二冊の心理尺度を紹介した著書には、ローゼンバーグが1965年に作成し、我が国では1982年に山本らが邦訳した10項目の「自尊感情尺度」が取り上げられていた。

それでは、この「自尊感情尺度」とは、どのような尺度であり、中学生に適用することが可能なのだろうか。

『心理測定尺度集Ⅰ』の中では、自尊感情を次のように説明している。

私たちは普段、「自分は運動神経がいい」「もう少し社交的な性格だったら」「私は個性的だ」などと自己の行動、性格、能力などを自分自身で評定している。このように、自分で自分を評定することを自己評価という。…（略）…

自己評価の結果をどの程度受容するかに応じて自尊感情（自尊心とも呼ばれる）が規定される。自尊感情とは自信の上位概念であり、自分自身を価値のある優れた存在とみる態度に伴う感情である。たとえば、自己のさまざまな側面に関する自己評価の結果、「私は物事を人並みには、うまくやれる」と感じる人もいれば、「何かにつけて、自分は役に立たない人間だ」などと感じる人もいる。自己評価が高ければ自尊感情の上昇に、自己評価が低ければ自尊感情の低下に結びつくが、自尊感情は自己評価に比べ、ある程度永続的で変化しにくい。<sup>17)</sup>

ローゼンバーグは、他者との比較により生じる優越感や劣等感ではなく、自身で自己への尊重や価値を評価する程度のことを自尊感情と考えている。また、自身を「非常によい（very good）」と感じるのではなく、「これでよい（good enough）」と感じる程度が自尊感情の高さを示すとしている。自尊感情が低いということは、自己拒否、自己不満足、自己軽蔑を表し、自己に対する尊敬を欠いていることを意味すると考え、表5に示す10項目の自尊感情尺度を作成している。<sup>18)</sup>

この尺度は、質問項目が少なく実施が容易である上に、信頼性・妥当性も共に高く、わが国で適用できる有用な尺度の一つである。対象者は大学生以上の成人であるが、質問項目の内容から判断すると、高校生の回答も可能であると考えられると紹介され



ている。<sup>19)</sup>

本継続研究では、この「自尊感情尺度」を用いて中学生を対象にプレテストを行い、中学生に回答可能であるかどうかを検討することとした。

表5 自尊感情尺度

1) 少なくとも人並みには、価値のある人間である
2) 色々な良い素質をもっている
3) 敗北者だと思ふことがある
4) 物事を人並みには、うまくやれる
5) 自分には、自慢できるところがない
6) 自分に対して肯定的である
7) だいたいにおいて、自分に満足している
8) もっと自分自身を尊敬できるようになりたい
9) じぶんは全くだめな人間だと思ふことがある
10) 何かにつけて自分は役に立たない人間だと思ふ

#### 4. 「学習者と人（家族・子ども）との関わり」により生じる心理傾向を測る心理測定尺度の検討

次に、家庭科の家族・保育学習の結果、「学習者と人（家族・子ども）との関わり」によって生じる心理傾向を測定する尺度を、先の「学習者自身」のそれと同じ方法で検討した。

しかし、人との関わりによる心理傾向を測る尺度は数多く開発されていたが、家族・保育学習による心理傾向の変化の測定にそのまま適用できるものはいだせなかった。そこで、本継続研究では、FBPにより生じる「学習者と人（家族・子ども）との関わり」の心理傾向を測定することに目的を絞り、これまでの中・高等学校でのFBP実践における子どもの獲得認識から、学習による心理傾向の変化を測る尺度の作成を、本学部教育心理学講座の水野先生にご指導いただき、試みることにした。

##### (1) FBPの学習による心理傾向の変化を測定する尺度の作成

###### 1) FBP実践による生徒の獲得認識

生徒は、FBP実践によってどのような心（心理傾向）の変化を生じるのだろうか。この仮説を立案するために、これまでの中・高等学校でのFBPの実践結果を表4・表6<sup>20) 21) 22)</sup>のようにまとめ、検討した。

表4・表6から、FBPの実施条件により生徒が獲得した認識の質と量は、異なっていた。獲得認識の項目に着目すると、中・高等学校の実施条件の違いにかかわらず、生徒が獲得していたのは、①「世話に伴う大変さ」②「FBに対する愛着」である。③「家族・他人の協力の必要性」④「子育てに対する責任」⑤「現在の自分に対する自己認識」⑥「養育態度の反省」は、中・高等学校の実施条件により、

生徒が獲得していた認識である。その他には、中学校で⑦「将来の自己認識」、高等学校で⑧「子どもが育つ環境としての家族」⑨「自分の親に対する思い」を生徒は獲得していた。

##### 2) 既存の心理測定尺度の検討

1) の生徒が獲得した①～⑨の認識から、FBPによる心理傾向の変化が考えられる要因を、以下に示す既存の尺度集の下位尺度から検討することとした。

- ・心理尺度ファイル<sup>23)</sup> (106尺度3344項目)
- ・心理測定尺度集Ⅰ<sup>24)</sup> (45尺度1313項目)
- ・心理測定尺度集Ⅱ<sup>25)</sup> (52尺度1693項目)
- ・心理測定尺度集Ⅲ<sup>26)</sup> (55尺度1513項目)
- ・心理測定尺度集Ⅳ<sup>27)</sup> (48尺度774項目)

以上の合計306尺度8637項目の下位尺度の項目に着目し、FBPの授業による心理傾向の変化を測ることができると考えられる「人とのかかわりに関する項目」228項目を抽出した。

##### 3) FBPに関する心理傾向の要因を含む既存の下位尺度の選択

次に、(1)の2)で抽出した228項目が含まれる既存の下位尺度を測定概念・対象年齢・質問文・項目数・回答選択肢の観点から検討し、表7の「A. 選択した既存の下位尺度」に示すFBPに関する要素を含むと考えられる18の下位尺度140項目を選択した。

##### 4) 下位尺度の再検討と改変

表7に示す「A. 選択した既存の下位尺度」から、項目数を絞るために、再度、測定概念・項目数を検討し、表7「B. 再選択した既存の下位尺度」に示したb～kの10下位尺度84項目を選出した。その質問項目は表8に示す通りである。

表8の「B. 選択した既存の下位尺度」を一つの調査として中学生を対象に実施するにあたり、下記のア～エの改変を行う必要があると判断した。

ア：統一した答えやすい教示に改変する必要がある下位尺度

- e 社会志向性P尺度
- f 社会志向性N尺度
- g 基本的信頼感
- h 対人的信頼感
- i 乳幼児への好意感情尺度
- j 育児への積極性尺度
- k 人間同士の理解・共感の可能性についての感じ方の次元

イ：回答法を7件法から5件法に変更する必要がある

表6 高等学校におけるF B Pの授業開発過程

		一第段階	第二段階	第三段階
実践校		新潟県立長岡大手高等学校		
位置づけ		特別編成授業	専門科目「発達と保育」の導入	普通科目「家庭総合」の家族学習の導入
実施年月		2003年12月	2004年 5 月	2004年 9 月
対象者		第3学年	第2学年	
		男子3名 女子28名	女子40名	男子19名 女子21名
F Bの体重		生徒の誕生時の体重		
F B P の 内 容	導 入 ↓ F Bの養育 ↓ まとめ	第1回授業（2時間）12月12日 ↓ （土日を含む5日間） 第2回授業（2時間）12月16日	第1回授業（2時間）5月18日 ↓ （土日を含む7日間） 第2回授業（2時間）6月24日	第1回授業（2時間）9月8日 ↓ （土日を含む7日間） 第2回授業（1時間）9月14日
	親子写真	あ り		
	B Jの質問項目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・FBと出会った時点での気持ち 5問</li> <li>・FBと共に活動して感じたこと 26問</li> <li>・FBと別れる時の気持ち 5問</li> <li>・プロジェクト終了後の生活 4問</li> <li>・自由記述 2問</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・FBと出会った時点での気持ち 7問</li> <li>・FBと共に活動して感じたこと 26問</li> <li>・FBと別れる時の気持ち 2問</li> <li>・プロジェクト終了後の生活 1問</li> <li>・自由記述 1問</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・FBと出会った時点での気持ち 7問</li> <li>・FBと共に活動して感じたこと 26問</li> <li>・FBと別れる時の気持ち 2問</li> <li>・プロジェクト終了後の生活 1問</li> <li>・自由記述 1問</li> </ul>
	ディスカッションのテーマ	①赤ちゃんをもつということ ②共に暮らすということに関して生じた問題 ③親になること	①共に暮らすということに関して生じた問題 ②子どもを持つということ ③今後学ばなければならないこと	①共に暮らすということに関して生じた問題 ②子どもを持つということ ③今後学ばなければならないこと
	獲得した認識	世話に伴う大変さ ○（90.3%） 家族や他人の協力の必要性 ○（87.1%） FBに対する愛着 ○（83.9%） 子育てに対する責任 ○（67.7%） 子どもが育つ環境としての家族 ○（51.6%） 子どもを持つ楽しさ ○（45.2%）	○（42.4%） ○（65%） ○（50.0%） ○（5.0%） ○（45.0%） ○（40.0%） ○（47.0%）	○（73.0%） ○（43.2%） ○（54.1%） ○（54.1%）
				○（97.0%）

(引用文献20) 21) 22) より河原作成)

ある尺度

g 基本的信頼感

h 対人的信頼感

ウ：下位項目の中で、中学生には回答困難であると判断した項目を除いて用いる必要がある尺度

i 育児への積極性尺度 15項目→12項目

エ：中学生には回答困難・表現が不適切であり、項目の表現を変える必要がある尺度

d 子どもの母親・父親への信頼感

i 育児への積極性尺度

### 5) 選択・改変した下位尺度（要因）と項目数の決定

以上の手順をふみ、F B Pにおける心理傾向の変化を測る尺度を表7「C. 選択・改変した下位尺度（要因）」に示すb～kの10下位尺度（要因）81項

目で構成することとした。

### （2）調査用紙の作成

IV—3（2）の「学習者自身」の心理傾向を測る心理測定尺度として選択した「自尊感情尺度」（以下、「a 自尊感情」と称す）10項目<sup>31)</sup>と、IV—4（1）5）で決定した表7の「C. 選択・改変した下位尺度（要因）」に示すF B Pにおける心理傾向の変化を測る尺度b～kの10下位尺度（要因）81項目を併せて、11下位尺度（要因）91項目で調査用紙（案）を作成した。

作成した調査用紙（案）を附属中学校の家庭科担当の小橋・原田が点検し、「生徒の心情を考慮すると、『a 自尊感情』の質問項目に他の質問項目を混ぜ込んで調査用紙を作成する必要がある」という問題が見出された。これを修正し、調査用紙を作成した。

表7 FBPに関する要素を含む既存の尺度と選択・改変した下位尺度（要因）とその項目数

A. 選択した既存の尺度		項目数	B. 再選択した既存の下位尺度		項目数	C. 選択・改変した下位尺度（要因）		項目数
尺度名（作成者、年）	下位尺度		尺度	項目数		尺度	項目数	
自己受容測定尺度 （沢崎・佐藤，1984） <sup>28)</sup>	・開放性 ・真面目さ ・自己中心性	7 10 9	b 開放性 c 自己中心性	7 9	7 9	b 自己受容（開放性） c 自己受容（自己中心性）	7 9	7 9
親子間の信頼感に関する尺度 （酒井ら，2002；酒井，2005） <sup>29)</sup>	・母親・父親への信頼感 ・母親・父親が子どもへの信頼感	8 9	d 母親・父親への信頼感	8	8	d 子どもの養育者への信頼感	8	8
個人志向・社会志向PN尺度 （伊藤，1993；1995） <sup>30)</sup>	・個人志向性P尺度 ・社会志向性P尺度 ・個人志向性N尺度 ・社会志向性N尺度	8 9 6 7	e 社会志向性P尺度 f 社会志向性N尺度	9 7	9 7	e 社会志向性ポジティブ f 社会志向性ネガティブ	9 7	9 7
向社会行動的行動尺度 （中・高生版） （横塚，1989） <sup>31)</sup>	・学校 ・家庭 ・社会	8 8 4						
基本的信頼感尺度 （谷，1996） <sup>32)</sup>	・基本的信頼感 ・対人的信頼感	6 5	g 基本的信頼感 h 対人的信頼感	6 5	6 5	g 基本的信頼感 h 対人的信頼感	6 5	6 5
母性準備性尺度 （青木・松井，1988） <sup>33)</sup>	・乳幼児への好意感情尺度 ・育児への積極性尺度	9 15	i 乳幼児への好意感情尺度 j 育児への積極性尺度	9 15	9 15	i 乳幼児への好意感情 j 育児への積極性	9 12	9 12
孤独感の類型判断尺度 （落合，1983） <sup>34)</sup>	・人間同士の理解・共感の可能性についての感じ方の次元 ・人間の個性の自覚についての次元	9 7	k 人間同士の理解・共感の可能性についての感じ方の次元	9	9	k 人間同士の理解・共感の可能性	9	9
合 計		140	合 計	84	84	合 計	81	81

（引用文献28）29）30）31）32）33）34）より河原作成）

表8 FBPに関する心理傾向の要因を含む既存の尺度・下位尺度・質問項目

A. 選択した既存の尺度	B. 選択した既存の下位尺度		
	下位尺度	項目数	質問項目
自己受容測定尺度 （沢崎・佐藤，1984） <sup>28)</sup>	b 開放性	7	11) 私は、友だち作りが下手だ 12) 私は、非常に陽気な人間である 13) 私は、学校生活を楽しくしていない 14) 私は、どんな人とも無理なくつきあえる方だ 15) 私は、人との対応がうまくない 16) 私は、他人とうちとけない人間である 17) 私は、異性の友だちがほとんどできない
	c 自己中心性	9	18) 私は、友だちに何か言われると、すぐにむきになることが多い 19) 私は、他人に対して気を使いすぎる 20) 私は、人からよく思われたいという気持ちが非常に強い 21) 私は、人との競争(対抗)意識が非常に強い方だ 22) 私は、友だちからどう思われているか気にする方だ 23) 私は、人と争うことがない 24) 私は、常に自分が中心になって物事を進めないと気にいらぬ方だ 25) 私は、自分の思いどおりにならないと、すぐにイライラする方だ 26) 私は、人の過ちを気持ちよく許せる方だ
親子間の信頼感に関する尺度 （酒井ら，2002；酒井，2005） <sup>29)</sup>	d 母親・父親への信頼感	8	27) お母（父）さんはあなたのことが一番好きだと思いますか 28) お母（父）さんはあなたを一番信頼していると思いますか 29) あなたといっしょにいてお母（父）さんは幸せだと思いますか 30) お母（父）さんはあなたに何でも話してくれますか 31) お母（父）さんを誰よりも信頼できますか 32) あなたはお母（父）さんといっしょにいて幸せですか 33) あなたはお母（父）さんが好きですか 34) あなたはお母（父）さんに何でも話せますか
個人志向・社会志向PN尺度 （伊藤，1993；1995） <sup>30)</sup>	e 社会志向性P尺度	9	35) 人に対しては、誠実であるように心がけている 36) 他の人から尊敬される人間になりたい 37) 他の方の気持ちになることができる 38) 他人に恥ずかしくないように生きている 39) 周りとの調和を重んじている 40) 社会のルールに従って生きていると思う 41) 社会（周りの人）のために役に立つ人間になりたい

		42) 人とのつながりを大切にしている 43) 社会（周りの人）の中で自分が果たすべき役割がある
	f 社会志向性N尺度	7 44) 何かを決める場合、周りの人に合わせることが多い 45) 人の先頭に立つより、多少がまんしてでも相手に従うほうだ 46) 人前では見せかけの自分を作ってしまう 47) 何かよくないことがあると、すぐ自分のせいだと考えてしまう 48) 人の目ばかり気にして、自分を失いそうになることがある 49) 困ったことがあると、すぐ人に頼ってしまう 50) 相手の顔色をうかがうことが多い
基本的信頼感尺度 (谷, 1996) <sup>32)</sup>	g 基本的信頼感	6 51) 自分自身のことが信頼できないと感じることがある 52) 人から見捨てられたのではないかと心配になることがある 53) 物事がうまくゆかなくなると、自分の中にひきこもってしまうことがある 54) 人生に対して、不信感を感じることがある 55) 私は自分自身を十分に信頼できると感じる 56) 失敗すると、二度と立ち直れないような気がする
	h 対人的信頼感	5 57) 普通、人はお互いに誠実にかかわりあっているものだと思う。 58) 自分が困ったときには、周りの人々からの援助が期待できる 59) 一般的に、人間は信頼できるものであると思う 60) 私には頼りにできる人がほとんどいない 61) 周囲の人々によって自分が支えられていると感じる
母性準備性尺度 (青木・松井, 1988) <sup>33)</sup>	i 乳幼児への好意感情尺度	9 62) あなたは赤ちゃんが好きですか 63) 赤ちゃんをみると「かわいいな」と思いますか 64) 赤ちゃんのことにについて知りたいと思いますか 65) 赤ちゃんに関心がありますか 66) 赤ちゃんと一緒に遊ぶことが好きですか 67) 赤ちゃんを見るとあやしたり笑いかけたりしたりしますか 68) 赤ちゃんを抱いてみたいと思いますか 69) 赤ちゃんの世話をすることが好きですか 70) 赤ちゃんに興味がありますか
	j 育児への積極性尺度	15 71) 育児はすばらしい仕事だと思う 72) 育児をしている間に、世の中の動きから取り残されてしまうと思う 73) 育児によって自分自身もまた成長できると思う 74) 育児は楽しいと思う 75) 育児をしていると子どものことばかりで視野が狭くなると思う 76) 育児は女性の生きがいだと思う 77) 育児はつらい仕事だと思う 78) 育児をしていると、自分の好きなことができないと思う 79) 育児はつまらない仕事だと思う 80) 将来、育児をするのが楽しみだ 81) 将来、自分が育児をするなんて考えたこともない 82) 育児をしている母親はかがやいてみえる 83) 育児をいている母親は疲れてみすばらしくみえる 84) 自分も育児をやってみたいと思う 85) 自分は育児をするには自信がない
孤独感の類型判断尺度 (落合, 1983) <sup>34)</sup>	k 人間同士の理解・共感の可能性についての感じ方の次元	9 86) 私のことに親身に相談相手になってくれる人はいないと思う 87) 人間は、他人の喜びや悩みを一緒に味わうことができると思う 88) 私のことを周りの人は理解してくれていると、私は感じている 89) 私は、私の生き方を誰かが理解してくれと信じている 90) 私の考えや感じを何人かの人は分かってくれると思う 91) 私の考えや感じを誰もわかってくれないと思う 92) 私の生き方を誰もわかってくれはしないと思う 93) 誰も私をわかってくれないと、私は感じている 94) 人間は、互いに相手の気持ちをわかりあえると思う
合 計		84

(引用文献28) 29) 30) 31) 32) 33) 34) より河原作成)

## V. プレテストの実施

年男子100名、女子100名、計200名とし、実施時期は平成20年3月である。

作成した調査用紙が、中学生に適用できるかどうかを検討するためのプレテストを、以下の方法で実施した。

### 1. 調査対象者・実施時期

調査対象は、岡山大学教育学部附属中学校第2学

### 2. 実施方法

①附属中学校家庭科担当の小橋・原田から、生徒と保護者に書面による調査依頼を、生徒経由で行った。

- ②小橋・原田が調査用紙を生徒に配布し、宿題として持ち帰らせて回答を行わせた。  
③回答後の調査用紙は、後日任意で家庭科教室に提出させた。

## VI. 調査結果の検討

### 1. 調査用紙の回収率

その結果、表9に示す2年生男子54名、女子80名、計134名から回答を得ることができた。

表9 調査用紙の回収数と回収率

	男子	女子	合計	回収率
第2学年	54/100名	80/100名	134/200名	67%

### 2. 調査結果の分析

回収した調査用紙は、統計処理ソフトSPSSを用い、a～kの11要因（下位尺度）それぞれにおいて信頼性を分析した。その結果、表10に示すように、各要因（下位尺度）の内的整合性を示すクロンバックの $\alpha$ 係数が、いずれも0.7以上もしくはそれに近い値になったため、作成した質問項目は本研究に用いることが可能であることが示唆された。

また、2つの下位尺度（要因）に、以下の修正を加える必要性が見出された。

#### 1) 「a 自尊感情の下位尺度（要因）」について

表5に示した自尊感情尺度の「8）もっと自分を尊敬できるようになりたい」は、プレテス

表10 「作成した調査用紙の下位尺度(要因)」の信頼性評価

		(N = 134)
要因（下位尺度）	クロンバックの $\alpha$ 係	
a 自尊感情	.85	
b 自己受容（開放性）	.73	
c 自己受容（自己中心性）	.67	
d 子どもの養育者への信頼感	.92	
e 社会志向性ポジティブ	.87	
f 社会志向性ネガティブ	.71	
g 基本的信頼感	.80	
h 対人的信頼感	.79	
i 乳幼児への好意感情	.95	
j 育児への積極性	.88	
k 人間同士の理解・共感の可能性	.93	

トの結果、得点と負の相関を示しており、中学生には不適切な質問項目と考えられたため、この1項目は除く。

#### 2) b 自己受容(開放性)・c 自己受容(自己中心性)について

中学生においては回答が困難だったため、教示・回答方法を改める。また、生徒の集中力の問題から自己受容b・cの質問項目を調査用紙の最初に配置する。

以上の点に修正を加え、表11に示す本調査用紙を作成した。なお、本調査用紙の質問項目（1～90）と、それを作成するために用いた表5・8の既存の心理測定尺度項目との対応は、表11の欄外に示す通りである。

表11 本調査用紙

年 組 番 (1男・2女) 氏名				ある それ それで いい は か ま わ な い な い	いいえ	1	2	表5・8に示す既存の尺度質問項目対照番号
<p>【記入上の注意】それぞれの文章をよく読んで、あてはまると思うときには「はい」に○、あてはまらないと思うときには「いいえ」に○をつけてください。 さらに、次の質問「そういう自分をどう思いますか」に対して、1か2のどちらか自分の考えに近い方の数字を○でかこんでください。</p>								
《例》 私は、人の前で話すのが嫌いな方だ	はい	いいえ	1	2				
1. 私は、友だち作りが下手だ	はい	いいえ	1	2				11)
2. 私は、友だちに何か言われると、すぐにむきになることが多い	はい	いいえ	1	2				18)
3. 私は、非常に陽気な人間である	はい	いいえ	1	2				12)
4. 私は、他人に対して気を使いすぎる	はい	いいえ	1	2				19)
5. 私は、人からよく思われたいという気持ちが非常に強い	はい	いいえ	1	2				20)
6. 私は、学校生活を楽しんでいない	はい	いいえ	1	2				13)
7. 私は、人との競争（対抗）意識が非常に強いほうだ	はい	いいえ	1	2				21)
8. 私は、友だちからどう思われているか気にする方だ	はい	いいえ	1	2				22)
9. 私は、どんな人とでも無理なくつきあえるほうだ	はい	いいえ	1	2				14)

10. 私は、人と争うことがない	はい	いいえ	1	2	23)	
11. 私は、常に自分が中心になって物事を進めないと気にいらないうだ	はい	いいえ	1	2	24)	
12. 私は、人との対応がうまくない	はい	いいえ	1	2	15)	
13. 私は、他人とうちとけない人間である	はい	いいえ	1	2	16)	
14. 私は、異性の友だちがほとんどできない	はい	いいえ	1	2	17)	
15. 私は、自分の思いどおりにならないと、すぐにイライラする方だ	はい	いいえ	1	2	25)	
16. 私は、人の過ちを気持ちよく許せる方だ	はい	いいえ	1	2	26)	
あなたを育ててくれた人（お母さん・お父さん・おばあちゃんおじいちゃんなど）についてききます。それぞれあてはまる数字を○でかこんでください	いいえ	少し いいえ	少し はい	はい		
17. あなたを育ててくれた人はあなたのことが好きだと思いますか	1	2	3	4	27)	
18. あなたを育ててくれた人はあなたを信頼していると思いますか	1	2	3	4	28)	
19. あなたといっしょにいて、あなたを育ててくれた人は幸せだと思いますか	1	2	3	4	29)	
20. あなたを育ててくれた人はあなたに何でも話してくれますか	1	2	3	4	30)	
21. あなたを育ててくれた人を信頼できますか	1	2	3	4	31)	
22. あなたは、あなたを育ててくれた人といっしょにいて幸せですか	1	2	3	4	32)	
23. あなたはあなたを育ててくれた人が好きですか	1	2	3	4	33)	
24. あなたはあなたを育ててくれた人に何でも話せますか	1	2	3	4	34)	
それぞれの文章をよく読んで、それが現在の自分にとってどのくらいあてはまるかを考え、最も適していると思われる数字を○でかこんでください。	あては まらない	ど ち ら か と い う と	ど ち ら か と い う と	あては まる	あては まる	
《例》自分の心に正直に生きている	1	2	3	4	5	
25. 何かを決める場合、周りの人に合わせる人が多い	1	2	3	4	5	44)
26. 人の先頭に立つより、多少がまんしてでも相手に従うほうだ	1	2	3	4	5	45)
27. 人前では見せかけの自分を作ってしまう	1	2	3	4	5	46)
28. 何かよくないことがあると、すぐ自分のせいだと考えてしまう	1	2	3	4	5	47)
29. 人の目ばかり気にして、自分を失いそうになることがある	1	2	3	4	5	48)
30. 困ったことがあると、すぐ人に頼ってしまう	1	2	3	4	5	49)
31. 相手の顔色をうかがうことが多い	1	2	3	4	5	50)
32. 人に対しては、誠実であるように心がけている	1	2	3	4	5	35)
33. 他の人から尊敬される人間になりたい	1	2	3	4	5	36)
35. 他人に恥ずかしくないようにいきている	1	2	3	4	5	38)
36. 周りとの調和を重んじている	1	2	3	4	5	39)
37. 社会のルールに従って生きていると思う	1	2	3	4	5	40)
38. 社会（周りの人）の中で自分が果たすべき役割がある	1	2	3	4	5	41)
39. 社会（周りの人）のために役に立つ人間になりたい	1	2	3	4	5	43)
40. 人とのつながりを大切にしている	1	2	3	4	5	42)
41. 普通、人はお互いに誠実にかかわりあっているものだと思う	1	2	3	4	5	57)
42. 自分が困ったときには、周りの人々からの援助が期待できる	1	2	3	4	5	58)
43. 一般的に、人間は信頼できるものであると思う	1	2	3	4	5	59)
44. 私には頼りにできる人がほとんどいない	1	2	3	4	5	60)
45. 周囲の人々によって自分が支えられていると感じる	1	2	3	4	5	61)
46. 自分自身のことが信頼できないとかんじることもある	1	2	3	4	5	51)
47. 人から見捨てられたのではないかと心配になることがある	1	2	3	4	5	52)
48. 物事がうまくゆかなくなると、自分の中にひきこもってしまうことがある	1	2	3	4	5	53)
49. 少なくとも人並みには、価値のある人間である	1	2	3	4	5	1)
50. 色々な良い素質をもっている	1	2	3	4	5	2)
51. 人生に対して、不信感を感じることもある	1	2	3	4	5	54)

52. 私は自分自身を十分に信頼できると感じる	1 — 2 — 3 — 4 — 5	55)
53. 失敗すると、二度と立ち直れないような気がする	1 — 2 — 3 — 4 — 5	56)
54. あなたは赤ちゃんが好きですか	1 — 2 — 3 — 4 — 5	62)
55. 赤ちゃんをみると「かわいいな」と思いますか	1 — 2 — 3 — 4 — 5	63)
56. 赤ちゃんのことにについて知りたいと思いますか	1 — 2 — 3 — 4 — 5	64)
57. 赤ちゃんに関心がありますか	1 — 2 — 3 — 4 — 5	65)
58. 赤ちゃんと一緒に遊ぶことが好きですか	1 — 2 — 3 — 4 — 5	66)
59. 赤ちゃんを見るとあやしたり笑いかけたりしたりしますか	1 — 2 — 3 — 4 — 5	67)
60. 赤ちゃんを抱いてみたいと思いますか	1 — 2 — 3 — 4 — 5	68)
61. 赤ちゃんの世話をすることが好きですか	1 — 2 — 3 — 4 — 5	69)
62. 赤ちゃんに興味がありますか	1 — 2 — 3 — 4 — 5	70)
63. 育児はすばらしい仕事だと思う	1 — 2 — 3 — 4 — 5	71)
64. 育児によって自分自身もまた成長できると思う	1 — 2 — 3 — 4 — 5	73)
65. 育児は楽しいと思う	1 — 2 — 3 — 4 — 5	74)
66. 自分は全くだめな人間だと思うことがある	1 — 2 — 3 — 4 — 5	9)
67. 育児は親の生きがいのひとつだと思う	1 — 2 — 3 — 4 — 5	76)
68. 育児はつらい仕事だと思う	1 — 2 — 3 — 4 — 5	77)
69. 何かつけて自分は役に立たない人間だと思う	1 — 2 — 3 — 4 — 5	10)
70. 育児をしていると子どものことばかりで視野がせまくなると思う	1 — 2 — 3 — 4 — 5	75)
71. 敗北者だとよく思うことがある	1 — 2 — 3 — 4 — 5	3)
72. 育児をしていると、自分の好きなことができないと思う	1 — 2 — 3 — 4 — 5	77)
73. 育児はつまらない仕事だと思う	1 — 2 — 3 — 4 — 5	79)
74. 将来、育児をするのが楽しみだ	1 — 2 — 3 — 4 — 5	80)
75. 自分には、自慢できる場所があまりない	1 — 2 — 3 — 4 — 5	5)
76. 将来、自分が育児をするなんて考えたこともない	1 — 2 — 3 — 4 — 5	81)
77. 自分は育児をやってみたいと思う	1 — 2 — 3 — 4 — 5	84)
78. 物事を人並みには、うまくやれる	1 — 2 — 3 — 4 — 5	4)
79. 自分も育児をすることには自信がない	1 — 2 — 3 — 4 — 5	85)
80. 私のことに親身に相談相手になってくれる人はいないと思う	1 — 2 — 3 — 4 — 5	86)
81. 人間は、他人の喜びや悩みと一緒に味わうことができると思う	1 — 2 — 3 — 4 — 5	87)
82. 私のことを周りの人は理解してくれていると、私は感じている	1 — 2 — 3 — 4 — 5	88)
83. 自分に対して肯定的である	1 — 2 — 3 — 4 — 5	6)
84. 私は、私の生き方を誰かが理解してくれると信じている	1 — 2 — 3 — 4 — 5	89)
85. 私の考えや感じを何人かの人は分かってくれると思う	1 — 2 — 3 — 4 — 5	90)
86. 私の生き方を誰もわかってくれはしないと思う	1 — 2 — 3 — 4 — 5	92)
87. 私の考えや感じを誰もわかってくれないと思う	1 — 2 — 3 — 4 — 5	91)
88. 誰も私をわかってくれないと、私は感じている	1 — 2 — 3 — 4 — 5	93)
89. 人間は、お互いに相手の気持ちをわかりあえる	1 — 2 — 3 — 4 — 5	94)
90. だいたいにおいて、自分に満足している	1 — 2 — 3 — 4 — 5	7)

## VII. 今後の課題

これまで検討してきたように、本報で作成した本調査用紙は、家族・保育学習における「人格形成」の評価に適用できることが示唆された。

また、本年度、附属中学校では、年度当初に第2学年全員に道徳検査「NEW HUMAN」を実施する。この「NEW HUMAN」には、自分自身と人間関係の内容が含まれていたため、作成した本調査用紙に加えて「NEW HUMAN」を併せて検討していくこととした。

調査は、表3の年間指導計画に基づき、6月に「私たちの成長と家族」の導入学習であるFBP実

践の前後に本調査用紙と「NEW HUMAN」の2種類を用いて、事前・事後の調査を行った。それらの結果を分析することで、家族・保育学習における「学習者と子ども・家族の関わり」によって生じる心理傾向が、授業によってどのように変わったのかを考察していきたい。また、家庭科学習の評価に、心理測定尺度をどのように適用していくことができるかも併せて検討していきたい。

最後になりましたが、心理測定尺度作成のご指導をいただきました岡山大学教育学部の水野正憲先生に心からお礼申し上げます。

## 引用文献

- 1) 佐藤園, 河原浩子, 平田美智子, 小橋和子, 原田省吾「教科としての目標達成を目指す家庭科評価研究(第1報)―平成20年版学習指導要領に示された学校教育の理念と家庭科の位置づけ・問題点―」岡山大学教育学部研究集録第139号, 2008, 101-108頁
- 2) 文部科学省『中学校学習指導要領(平成10年12月)解説―技術・家庭編―』, 東京書籍, 2004, 110-111頁
- 3) 文部科学省『中学校学習指導要領解説技術・家庭編』, 教育図書, 2008, 93-94頁
- 4) 北尾倫彦他編『平成14年版 観点別学習状況の新評価基準表中学校技術・家庭―題材の評価基準とABC判定基準―』, 図書文化, 2002, 157-160頁
- 5) 第30回岡山大学教育学部附属中学校研究発表会技術・家庭科(家庭)資料(2007年11月23日)
- 6) 佐藤園, 三浦聖子, 原田省吾「自分と子どものかかわりから自己理解を図る保育授業の開発(第1報)―中学生に対するFlour Baby Projectの実践と検討―」, 岡山大学教育学部研究集録第128号, 2005, 147-155頁
- 7) 佐藤園, 三浦聖子, 原田省吾「自分と子どものかかわりから自己理解を図る保育授業の開発(第5報)―中学校選択教科「家庭」におけるFlour Baby Projectの実践と検討―」, 岡山大学教育学部研究集録第131号, 2006, 57-63頁
- 8) 佐藤園, 原田省吾「自分と子どものかかわりから自己理解を図る保育授業の開発(第6報)―中学校選択教科『家庭』におけるFlour Baby Projectの実践と検討―」, 日本家庭科教育学会中国地区会編『特色のある家庭科カリキュラム開発と授業研究』, 2006, 69-76頁
- 9) 前掲書5)
- 10) 前掲書5)
- 11) 山本真理子編『心理測定尺度集 人間の内面を探る』, サイエンス社, 2005, 監修のことば
- 12) 前掲書11) 2頁
- 13) 堀洋道ほか編『心理尺度ファイル』, 垣内出版, 2000
- 14) 前掲書11) 29-42頁
- 15) 中央教育審議会「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について(答申)」平成20年1月17日, 15頁
- 16) 文部科学省教育課程部会(第3期第18回議事録・配布資料「資料4 生きる力の育成を目指す教育内容・目標の構造」, [http://www.mext.go.jp/b\\_enu/shingi/chukyo3/siryo/001/07110606.htm](http://www.mext.go.jp/b_enu/shingi/chukyo3/siryo/001/07110606.htm)
- 17) 前掲書11) 26頁
- 18) 前掲書11) 29-31頁
- 19) 前掲書11) 29頁
- 20) 佐藤園, 三浦聖子, 佐藤ゆかり「自分と子どものかかわりから自己理解を図る保育授業の開発(第2報)―高校生に対するFlour Baby Projectの実践と検討―」, 岡山大学教育学部研究集録第128号, 2005, 157-168頁
- 21) 佐藤園, 三浦聖子, 佐藤ゆかり「自分と子どものかかわりから自己理解を図る保育授業の開発(第3報)―高等学校家庭科専門科目『発達と保育』におけるFlour Baby Projectの実践と検討―」, 岡山大学教育学部研究集録第129号, 2005, 87-95頁
- 22) 佐藤園, 三浦聖子, 佐藤ゆかり「自分と子どものかかわりから自己理解を図る保育授業の開発(第4報)―高等学校家庭科普通科目『家庭総合』におけるFlour Baby Projectの実践と検討―」, 岡山大学教育学部研究集録第130号, 2005, 67-76頁
- 23) 前掲書13)
- 24) 前掲書11)
- 25) 吉田富士雄編, 『心理測定尺度集Ⅱ 人間と社会のつながりをとらえる』, サイエンス社, 2007
- 26) 松井豊編, 『心理測定尺度集Ⅲ 心の健康をはかる』, サイエンス社, 2000
- 27) 櫻井茂男ら編, 『心理測定尺度集Ⅳ 子どもの発達を支える』, サイエンス社, 2007
- 28) 前掲書13) 70-73頁
- 29) 前掲書27) 176-182頁
- 30) 前掲書11) 129-133頁
- 31) 前掲書13) 278-282頁
- 32) 前掲書11) 72-75頁
- 33) 前掲書13) 380-383頁
- 34) 前掲書11) 217-221頁
- 35) 前掲書11) 29-31頁